



Title	パスカルとサン・シラン(1) : I. 最初の回心
Author(s)	田辺, 保
Citation	大阪外国語大学学報. 1966, 16, p. 261-281
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80266
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パスカルとサン・シラン (1)

I. 最初の回心

PASCAL ET SAINT-CYRAN (1)

Tamotsu TANABE

Résumé

En 1646, un accident imprévu de son père a donné à Blaise Pascal l'occasion d'entrer en contact avec deux gentilshommes jansénistes: les Deschamps, et d'être encouragé par eux à lire "des écrits de piété". Comme en a fait la remarque sa sœur Gilberte Périer, il a été illuminé de telle sorte par cette lecture, qu'il fut initié aux mystères de la foi. Ce fait, on le nomme "la première conversion de Pascal". A cette occasion-là, Pascal a connu pour la première fois les *Lettres spirituelles et chrétiennes* de Saint-Cyran, ainsi que les ouvrages de Jansénius, d'Arnauld. Il est bien aisé d'imaginer qu'il était un lecteur assez assidu de ces livres et qu'il a compris, très profondément mais intelligemment, le contenu de la nouvelle foi. En effet, la lecture des *Lettres* de Saint-Cyran lui a laissé dans le cœur les traces ineffaçables, qui l'obligeaient à commencer à penser un peu plus sincèrement sur la religion chrétienne. Ces maîtres jansénistes lui ont instruit, pour embrasser parfaitement la foi, la nécessité du cœur renouvelé à l'aide de la grâce absolue et en même temps, la connaissance de l'incapacité de l'homme. Pascal n'a complètement renoncé ni aux recherches scientifiques, ni aux divertissements mondains, mais une fois projetée par Saint-Cyran, cette partie d'ombre s'agrandira dans son cœur jusqu'à le remplir de pensées de néant et de vanité pour la vie terrestre.

(1)

姉ジルベルト・ペリエの書きのこした《*La Vie de Pascal*》の中に、次のような記述がみられる。

«Immédiatement après ces expériences, et lorsqu'il n'avait pas encore vingt-quatre ans, la Providence de Dieu ayant fait naître une occasion qui l'obligea de lire *des écrits de piété*, Dieu l'éclaira de telle sorte par *cette lecture* qu'il comprit parfaitement que la religion chrétienne nous oblige à ne vivre que pour Dieu et à n'avoir point d'autre objet que lui…»⁽¹⁾

この実験とは、1646年の真空実験のことである。この年10月、ディエップに赴いたピエール・プチが当時ルーアンに滞在中のパスカル家を訪問、メルセンヌよりイタリア人トリチェルリの真空実験（1644）追試の失敗を聞いたことを語った⁽²⁾。パスカルとその父エチエンヌは、プチの帰途、ただちに4ピエ試験管をつくって自らの手で実験を再び行い、トリチェルリの成果を確かめた。ところで、ジルベルトによれば、この実験の直後に上記のような出来事が起ったと記されているが、これは彼女の思い違いであり、正しくはこの実験よりも先の事柄である⁽³⁾。同じジルベルトがパスカルの妹について書いた《*La Vie de Jacqueline Pascal*》には、次のように記録されている。

«Au mois de janvier de l'année 1646, mon père s'étant démis une cuisse en tombant sur la glace, il ne put prendre confiance en cet accident qu'à MM. de La Bouteillerie et des Landes, qui eurent la bonté de demeurer chez lui trois mois de suite, pour être présents et pour remédier à tous les accidents qui arrivaient à toute heure. Toute la maison profita du séjour de ces messieurs. Leurs discours édifiants et leur bonne vie que l'on connaissait donnèrent envie à mon père, à mon frère et à ma sœur, de voir *les livres qu' on jugeait qui leur avaient servi pour parvenir à cet état...*»⁽⁴⁾

この事件が、いわゆるパスカルの「最初の回心（la première conversion）」と言われるものである。この出来事の経過については、姪マルグリット・ペリエがその《*Mémoires sur Pascal et sa Famille*》の中に、さらにくわしく報じている⁽⁵⁾。

父エチエンヌが氷上へ一人で出かけて行ったのは、たまたまルーアンの郊外で二人の *gentils-hommes* が決闘をしかけているという知らせがあり、その仲裁をするためであった。折悪しく、馬車に氷上を走る整備ができていなかったために徒歩で出かけて転倒し、膝を折ったのであった。父はただちに家へ運ばれ、当時高名であり、エチエンヌと親交のあった医師デジャン兄弟（Adrien et Jean Deschamps）が呼びにやられたが、兄弟ともあいにく不在であり、ルーアン

から十里も離れた所まで探しに派遣された。そのため治療がおくれて、脱臼の回復が手間どり、デシャン兄弟たちは3ヶ月もパスカル家に滞在しなければならなくなった。そして、この3ヶ月の間にかれらは、パスカル家の人々に大きい感化を残すのである。

《Durant ces trois mois, ces Messieurs, qui avaient autant de zèle et de charité pour le bien spirituel du prochain que pour le temporel, remarquaient dans mon grand-père et dans toute sa famille beaucoup d'esprit, et regardant comme un très grand dommage que tant de beaux talents fussent seulement employés à des sciences humaines dont ils connaissent tous bien le néant et le vide, ils s'attachèrent beaucoup à M. Pascal, mon oncle, pour le faire entrer dans *des lectures de livres de piété solide*, et pour les faire goûter…》⁽⁶⁾

以上の資料によってもわかるように、パスカルが信仰書をしきりと読み出したのは、まさにこの出来事が機縁になっている。ジルベルトは、具体的にその著者の名もあげている。

《Ce fut donc alors qu'ils (Blaise et Jacqueline) commencèrent tous à prendre connaissance des ouvrages de M. Jansénius, de *M. de Saint-Cyran*, de M. Arnauld et des autres écrits dont ils furent…》⁽⁷⁾

パスカルがサン・シランの著作を実際にとり上げたのは、まさにこの時期が最初であったと断言してもよい。もちろん、当時世間を騒がせていた「ジャンセニスト」たちのことをかれが知らなかったはずはなく、同じオーヴェルニュ出のアルノー家の人々と知り合いであったパスカルの家族はポール・ロワイヤルの指導者サン・シランの名も、早くから聞かされていたことであろう。しかし、《intime et direct》な関係において、パスカルがサン・シランを知った年代を、この「最初の回心」直後の一時期とみなすのは至当であろうと思われる⁽⁸⁾。ところで、

《…tout le christianisme de Pascal est dans ces lectures de la première heure qui eurent sur lui une influence décisive. Dès 1646, Pascal connaît et adopte la foi dans laquelle ii est mort…》⁽⁹⁾

と言われ、また、

《…Saint-Cyran et ses disciples —an premier rang desquels il convient de mettre Pascal…》⁽¹⁰⁾

と述べられてきた事実は、今ではおそらくだれにも否定することのできないものであろう。この時、たまたま遭遇したサン・シランの宗教が、これまで主として父によって培われてきたかれの精神的性格に深い影響を与え、ここでかれの敬虔の型を決定したのである。この時以後、かれの思想にはあの特有の《pathétique》な調べがともないはじめるのである。

「最初の回心」については、これまでたとえば次のような見方が一般的であった。

《…The word 'conversion', however, is too forcible to be applied at this point to Blaise Pascal himself…》(T.S. Eliot)⁽¹¹⁾

《…quoiqu'on en dise, sa 'conversion' n' est pas ce puissant effort qui absorbe, qui concentre tout l'être humain dans une pensée unique, d' où tout le reste désormais dépendra…》(F. Strowski)⁽¹²⁾

《…dans cette 'conversion', l'intelligence de Pascal semble avoir été 'touchée' bien plus que son cœur…》(V. Giraud)⁽¹³⁾

しかしながら、とにかくこの時期にこれまでパスカルのたどってきた歩みを決定的にある方向へ向ける一つの強い動機が働いたことは確かであったとみてよい。

《Pascal… au bout de cette allée, s'achemine de loin vers Port-Royal…》(Sainte-Beuve)⁽¹⁴⁾

この方向づけは一つの根本的反省を呼びさました。すなわち、これまで自分が自然的な興味と天賦の性向のおもむくままに傾倒してきた知的業作・学問研究なども、その追求だけが目的とされるならば否定的な意味しか持たないこと、絶対の価値を認めることができないことを教えられたのである。この新しい視点を示されたこと、より高い次元との接触こそ、「最初の回心」のもっとも重要な内容であったと言えよう。

ところで、パスカルがこの時偶々伝えられたジャンセニズムの峻厳な教理に急速にひきこまれて行った最大の理由は何であろうか。パスカルの心理学的特長として、よくオーヴェルニュ人特有の《la raideur et l'inflexibilité》が指摘され⁽¹⁵⁾、また、「生れながらに《stoïque》な精神」(アヴェ)との定義が与えられる⁽¹⁶⁾。こういった精神的に不羈の性格をもつかれが、かえって厳正かつ純粋な霊性の種類にひかれて行くことの必然性は了解できるのであるが、わたしたちは、なおこのほかにもいくつかの内的外的な原因を考えてみることができる。M. ビンヨップは、その時期パスカルがこうした峻烈な教えを渴仰する年齢にあったことを理由にあげており⁽¹⁷⁾、野田又夫氏は、「ルーアンでこの当時目撃した悲惨、とくに政治的権力の根本的な不正への洞察からであった」⁽¹⁸⁾と述べておられるが、わたしはこのほかにもう一つのかくれた理由を想定してみたと思う。パスカルは、「18才の時以来一日も苦痛なしにすごしたことはなかった」⁽¹⁹⁾と言われるほどに生来病身であったが、この頃には数年来の計算機製作の苦労や過度の知的労働のために、健康状態は異常に悪化し、ほとんど半病人のような毎日をすごしていたと言われており、人知れずかれを苦しめるこの病いが、かれをしてすべてのうつろい易い《divertissements》からそむけさせ、ひたすら内に思いを深めさせていたのではあるまいかと想像される。翌47年には、病いは重症となり、5月良医につくために父より先にパリに出ている。この24才の青年には、当時ひそかな《crise morale》が迫っており、それがたまたま父の危禍に出会って、つよい精神的覚醒をうながされるにいたった直接の原因ではなかったかと思われる。二人の gentilshommes は、まずブレーズの才能に目をつけ、その心を動かすために力をつくすのであるが、先に回心したか

れが父や姉妹の説得のために努力する熱情のはげしさにわたしたちは注意しておきたいと思う。

《…il connut avec ces Messieurs le bien; il le sentit, il l'aima et il l'embrassa. Et quand ils l'eurent gagné à Dieu, ils eurent toute la famille; car lorsque mon grand-père commença à être en état de s'appliquer à quelque chose après un si grand mal, son fils, commençant à goûter Dieu, le lui fit goûter aussi, et à ma tante, sa sœur…》⁽²⁰⁾

さて、この小論は前二論文につづく本論として⁽²¹⁾、サン・シランを受けとめたパスカルの心情の配置を精細に見きわめ、そしてパスカルの思想の内容と発展にサン・シランの《ombre》がどのようなかげりを添えるにいったかを限定しようとするものである⁽²²⁾。『パンセ』の作者は、ほかにも多くの外的 sources の影響を受けているが、何より顕著にサン・シランの精神を継承したと言われており、この二人の生涯をいろどる諸事実、行動、著作などを手がかりに、パスカルとサン・シランの関係を明確にあとづけ、あわせて17世紀フランス精神史の一面に毅然としてそびえ立つこの特異な霊性の相貌を見定めてみたいと思う。

(2)

「最初の回心」にいたるまで、パスカルはどのような環境においてその宗教的情操を培われてきたのであろうか。

3才の時に失った母アントワネットは、《très pieuse et très charitable》な人であったと言われる。母の亡きあと、父エチエンヌは終生再婚せず、子供の教育にうちこんだ。愛情も深く、すぐれた才知の人であった父は、ただ一人の男の子であるブレーズの教育を他人まかせにせず、独自の方針を立てて、計画的に自らその薫陶にあたった。ところで、エチエンヌという人は、ほとんど独学ながら当時の有数の学者たちと対等に論じ合うことができるほどの学識の持主であり、その時代の典型的な知識人、言葉のあらゆる意味で完全な《honnête homme》であると言ってよかった。つまり、属していた階級《noblesse de robe》に特有の謹厳さ・実直さと、反面、ルネサンス期以後の知識人共通の精神傾向である《esprit libre》の所有者であった。

宗教上の義務に関しても、とにかく社会的に要求されているかぎりのことは忠実に果しており、特にあらわな軽蔑や反感を示すことなく、むしろ子供たちに向っては早くから宗教に対する尊敬を教えこんでいた。

《…mon père, qui ayant lui-même un très grand respect pour la religion, le lui (à Blaise) avait inspiré dès l'enfance…》⁽²³⁾

しかし、ジルベルトも「最初の回心」にいたるまでの宗教教育について特にくわしく記していないところから推しても、それが伝統と習慣に従ったごくありきたりのものにすぎなかったこと

は明らかであり⁽²⁴⁾、ブレーズがルーアン移住後はじめて、おそい初聖体拝領を受けたこと、ジャックリーヌが1646年、20才を越してから堅振礼にあずかったということなどの事実を見ても⁽²⁵⁾、およそ例外的な熱心さとか特別に《mystique》な感覚への開眼は観察できないように思われる。父親の教育は、むしろ《exclusivement intellectuelle》な性質のものであり、事実に対して非常に冷静な推理の目を向けさせようとする客観的・批判的態度が一貫している。メナアルは、エチエンヌの精神的態度にみられる顕著な特長として、ユマニスムの影響、理性の次元の認容、自然主義の三点を指摘している⁽²⁶⁾。

ジルベルトが、

《…il ne s'est jamais appliqué aux questions curieuses de la théologie…》⁽²⁷⁾

《…quoiqu'il n'eût pas fait un étude particulier de la scolastique…》⁽²⁸⁾

と述べているように、まず神学のスコラ的な抽象的研究よりも、聖書や教父の書、公会議の決定といった基本的資料に直接にあたって、そこから思索をひきだしてくるという姿勢があった。ルフューヴルやエラスムスの古典研究が、カルヴァン派宗教改革に先行した歴史的事実、また、ジャンセニスムがアウグスチヌスの原典への厳密な回帰にはじまったことなどをここで思い出しておきたい。第二に、父エチエンヌは次のような準則を立てていた。

《…mon père…lui (à Blaise) donnant pour maxime que tout ce qui est l'objet de la foi ne saurait l'être de la raison…》⁽²⁹⁾

この考え方は、当時ようやく理性の価値を重視しはじめていた知的環境において、理性と信仰との葛藤を避けるためのもっとも巧みな対策・便宜的な手段としてひろく流布していたものであった。ブレーズは、こうした解決策を与えられていたために、宗教に対して決して懐疑を抱かずにすんだのであるが、のちノエル神父への手紙（1647年10月29日付）、《*Fragment d'un Traité du Vide*》（1649年）などに同じ類型の思想として表明され、やがて『パンセ』の中の三つの秩序の区別となって結実するにいたるのである。この考え方は、もともと単に功利的・実的なブルジョワの方策に墮する危険をはらんでおり、リベルタンなどはこれを逆に利用して放蕩に走ったと言われるが、他方、このように二元的な秩序の峻別は、すべての絶対的傾向をもつ神学にふしぎに共通にあらわれている考え方であり、ジャンセニスムにおいても同様の区別が見出されるという。さらに、ジルベルトは、妹ジャックリーヌについて次のような興味ある事実を記録している。

《…sans qu'elle eût jamais eu aucune pensée pour la religion, au contraire en ayant un grand éloignement et même du mépris, parce qu'elle croyait qu'on y pratiquait des choses qui n'étaient

pas capables de satisfaire un esprit raisonnable...》⁽²⁹⁾

ジャックリーヌのこういう態度は、その養育の責任者であったエチエンヌの精神状態を間接的に反映している。ここで《la religion》と言われているのは、la vie religieuse（すなわち、la vie monastique）のことであり、一般に特別の誓願を立てた修道士（女）に対する反感は、この当時既にいくらか道徳的墮落の兆を見せていた修道院そのものへの直接的な当然の嫌悪とあいまって、ひろく知識人の間に根をおろしていた在俗的・自然的価値へのひそかな愛好の心と結びついているように思われる。早くも、教会内部においても「戒律に従う修道士（réguliers）」への反撥があらわに見えはじめていたのである⁽³⁰⁾。エチエンヌがルーアンにおいて知己となったジャン・ピエール・カミュなどにも支持されていたこの傾向は、当時、Petrus Aurelius の匿名のもとに非常に霊的面で大きい影響力をもっていたサン・シランの教えを拠り所に立っていると言われる。こうして、エチエンヌが幼少期のブレーズに与えた感化の中には、それとなしにジャンセニスト的思考の構造を受け入れる素地が少しずつ準備されていたのである。

1635年から1648年まで、パリにおいてパスカル家の人々は、ブリズミッシュ通りに家を借りていた。この家は、ユイスマンスが「三大教会」の一つとしてたたえた l'église Saint-Merri の近くであり、当時この教会の教区財産管理委員長の任についていたのが、請願書審議官・参議員、モランジ侯、アントワヌ・バリヨンであった。この人の館へは、エチエンヌもたびたび出入りしており、そこで国家の枢要人物や大貴族たちと交際を結んだと言われる。1638年、ジャックリーヌが女王の御懐妊にあたって詩を書いたとき、彼女をサン・ジェルマンにともない、アンヌ・ドオリッシュに引き合わせたのはモランジ侯夫人であった。ところで、このバリヨンが、のちに教区のジャンセニスト派司祭デュアメル熱心な保護者になることをおぼえておきたい。

1639年、エチエンヌは前年ふとした事件にリシュリューの不寵を買ったものの、ジャックリーヌの嘆願で、再びゆるされ、次いで9月、「高ノルマンディ収税区勅任税務官」⁽³¹⁾に任じられ、ルーアンに派遣された。ルーアンにおけるエチエンヌの任務がどんなに困難なものであったかは周知の通りであるが、次々に課せられる重税、取締り官憲の横暴、反乱、大法官セギエじきじきの出張による中央政府の弾圧、ペストの流行などといった社会的不安、地方的混乱もおそらく原因となっているのであろう。当時ノルマンディー帯には、民衆的な宗教運動が非常に活潑であった。反宗教改革以後再び勢力を盛り返してきたカトリックは、地方の一般民衆の間へ滲透して行くとともに尖鋭化したり、また、神秘主義の衣をまとったりするようになった。ルーアンに住んでいたコルネイユが《Polyeucte》を書いたのは、決して偶然ではないと言われる⁽³²⁾。たぶんコルネイユは、自分の周囲にはげしい宗教的熱情に動かされるノルマンディの人々を、その目でな

がめていたにちがいないのである。有名な Compagnie du Saint-Sacrement の運動もその一つである。ところで、ルーアンおよびその近辺には、既にサン・シランの友人たち、弟子たちの幾人かが活躍していた。なかでも、パスカルの教区である Saint-Croix Saint-Ouen の主任司祭であり、オラトリオ会の司祭であったメイニャール神父は、1643年サン・シランの影響を受けて静修生活への召命を覚え、主任司祭の職を捨てて引退した。その大胆な行動は全教区民の憤激を買ひ、トマ・デュ・フォッセは、司祭をサン・シランのもとから引き戻しに出かけたといい、ルーアン市中はその噂でもちきりであった。また、ルーアン近くの村ルーヴィユの教会は、ジャン・ギユベールという司祭に司牧されていたが、この人はいわば一種の《réveil religieux》を起し、ルーアン付近の地方に多大の感化を与えた（Rouvillistes の名を残した）。マルグリット・ペリエは、次のようにギユベールのおもかげを伝えている。

《…un curé dans un village nommé Rouville, qui était un très grand serviteur de Dieu, qui gouvernait sa paroisse avec une piété très solide, qui y prêchait et y faisait des prêches admirables. Tout le voisinage y allait pour l'entendre et pour s'instruire et s'édifier; et il faisait un si grand bien à ceux qui le venaient entendre, que peu à peu, sa réputation se répandant, les gentilsommes de là autour et même les officiers de Rouen louaient des chambres dans ce village pour y aller coucher tous les samedis, afin d'être à portée de ne point perdre de ses prêches…》⁽³³⁾

ギユベールは、パリ大学神学部でアルノーと机を並べて学んだ間柄であり、サン・シランを指導者とし、《le plus profondément religieux selon le cœur de Saint-Cyran》⁽³⁴⁾とされている人であった。サン・シランからルーヴィユの司牧を託されておりながら、1642年までは「博士号を取得する準備のため」実際に司祭職につくことは延ばしていた。ヴァンセンヌ幽閉中のサン・シランは、ギユベールあてにたびたび手紙を送り、最後までしたしく霊的指導をつづけた。このギユベールによって、サン・シランの精神がノルマンディー帯にひろまり、その地方を精神的に変革し、多くのすぐれた人たちを「回心」させた。ジャンセニスト的な意味で、「回心」というのは、今日のように不信者が信仰に入るという意味ではなく、熱心さを伴わぬ慣習的な信仰生活をぬけ出して、より厳しく・悔改めた敬虔な生活に移る動きを名ざすものとして用いられた⁽³⁵⁾。

（パスカルの『パンセ』も、もちろん無神論者を宗教に引き入れるための護教論という目的をもつものであったが、それ以上に徹底的な信者、リベルタンのように表面的に宗教的勤めを守りながら放蕩の生活をしている連中を覚醒させ、「回心」させるために執筆されたと考える方がよいであろう）。ギユベールの導きで「回心」した人たちの中には、トマ・デュ・フォッセ⁽³⁶⁾、デジャン兄弟（一人はレ・ランド侯、もう一人はラ・ブーティユリー侯）などがあつた。このデジャン

兄弟は、「ともすると剣に手をかけまじき、何より名誉を重んずる人」であったが、回心後は生来の気性の烈しさを愛の行動にふり向け、一途な奉仕に献身した。

《… ces deux Messieurs furent si touchés de ses instructions qu'ils s'abandonnèrent entièrement à sa conduite, et résolurent de ne plus songer qu' à Dieu, à leur salut, et à la charité pour le prochain…》⁽³⁸⁾
デシャン兄弟は、俗に「接骨師 (rebouteurs)」と呼ばれているが、もともと外科的な研究や経験を積んだ医師であり、とくに身体障害者の治療に特別の技術を持っていたので、それぞれ自分の領地内に小さな病院を建て、苦しむ人々の診断にあたった。「レ・ランド侯は10人の子供がいたので10のベッドを、ラ・ブーティユリー侯は子供がなかったので20のベッドを、病院内にそなえ、あわせて30ベッドで貧しい人々をむかえて、あらゆる種類の治療にあたった」と記録されている⁽³⁹⁾。この人たちの善行はルーアン近辺に名高く、エチエンヌ・ペリエのような知識人にも信頼を寄せられており、この二人が前述したようにパスカル一家を回心に導き、師ギユベールを紹介するのである。

(3)

1638年ヴァンセンヌに捕われの身となってから、1643年の死にいたるまで、サン・シランは神学者や論争家であるよりも、何より霊的な指導者、《directeur d'âmes》として活動した。あるいはギユベール、あるいはアルノー、あるいはルブールにあてて多量に書かれた長文のその手紙は⁽⁴⁰⁾、まず何より、

《…des règles pures et très utiles pour leur conduite et pour mener une vie solidement chrestienne…》⁽⁴¹⁾

を教え、人々を「完全にして神に返す」という使命感につらぬかれていた。

《Je considère chaque âme comme un don que Dieu me fait…》⁽⁴²⁾

《Je ne cherche qu'à gagner les âmes à Dieu…》⁽⁴³⁾

性格的にも単に spéculatif であるよりはむしろ、激しい感情と人を慄えあがらせる悲痛とをたざらせて、圧倒的に相手を支配し引きずりこまずにおかない性質の人であった。ジャンセニスムという用語が、ルーヴァンの神学者ジャンセニウスの名に由来することは周知の事実であるが、ジャンセニウスが理論的に組織化した原理を、現実のただ中に実践可能な形で移植し、定着したのは、サン・シランというオリジナルな一人格であった。

《…les principes étaient dans “Augustinus”, Saint-Cyran se chargeait de l'application…》(G. Truc)⁽⁴⁴⁾

《…cette cité céleste, dont Jansénius avait rappelé les principes avec tant de netteté, Saint-Cyran essaya de la réaliser dans l'Eglise…》(L. Brunschwig)⁽⁴⁵⁾

《…Saint-Cyran, qui veut réduire la vérité à une théologie familière, dans le fond de l'âme, jusqu'au cœur, par delà l'intelligence…》(J.-E. d'Angers)⁽⁴⁶⁾

《De Hauranne would direct souls; Jansén would write books…》(E. Mortimer)⁽⁴⁷⁾

ジャンセニウスの主著『アウグスチヌス』の中に盛られた中心思想は、なるほど幾多の神学論争をまきおこしてきたが、その友人サン・シランによって体现され・伝えられた教えは一つの教理というよりはむしろ、一つの生き方、一つの実存的態度を代表するものであったと言いうる。すなわち、それは宗教に対する「もう少し真面目な」態度、名ばかりのうわべの信者に対してたましいの変革と「回心」を一義的に要求する態度であった。

《Les Jansénistes ont porté dans la religion *plus d'esprit de réflexion et plus d'approfondissement*…》⁽⁴⁸⁾

こうした内的純粋性の重要視は、オラトリオ会の創立者ベリユル以来の伝統であるが、サン・シランがその手紙や説教でくりかえし訴えたのは、まさにこの「新しい心」の必要であった⁽⁴⁹⁾。サン・シランにしたしく教えをうけていたギユベールが伝えたのはこの精神であり、真の宗教とはすべての心をふり向けて、ただ神のみ求めること、神以外の対象を愛さないことであるという一事であった。

《…Car Dieu répand la lumière de sa grâce dans les cœurs de ceux *qui n'ayment et ne regardent que lui*…》⁽⁵⁰⁾

《…que vous n'avez d'autre fin que Dieu…》⁽⁵¹⁾

《…il comprit parfaitement que la religion chrétienne nous oblige à ne vivre que pour Dieu, et à n'avoir point d' autre objet que lui …》⁽⁵²⁾

すなわち、エチエンヌが便宜的に、この世とは別の次元に属するものとして宗教の位置を仮に考えていたのに対し、サン・シランが教えたことは、宗教を別のものに考えてはならないこと、宗教は人間全体にかかわるものであり、いわば「心をつくして」⁽⁵³⁾これを愛すべきであり、信仰生活とこの世の秩序とは相い容れず、神にあって生きるためにはこの世を捨てねばならないということであった。そのため、救いに関係のない余の一切の知識は無益とされ、なくてはならぬ唯一の「必要なもの」への傾倒が要求された。

《Ce n'est pas ici le lieu, *ni le temps de la grande connaissance*. La foi du symbole des apôtres pourrait suffire *pour devenir saint*…Il n'y a rien qui abuse autant que ce grand éclat des vérités qui

plaisent à leurs esprits encore faibles… Pour s'avancer dans la voie de Dieu, il suffit, *au lieu de multiplier les connaissances*, (de) multiplier les bonnes œuvres…》⁽⁵⁴⁾

《…La parole que Jésus-Christ dit dans l'Evangile sur le sujet d'une femme qui s'inquit, quoy qu'elle ne s'employait qu' en des œuvres de temps pesée par cette personne. Enfin, dit-il, il n'y a qu' *'une seule chose qui soit nécessaire*; comme s'il eust voulu dire que tout le reste est superflu, et qu' on ne s'y peut engager sans préjudice de *cette seule chose nécessaire*…》⁽⁵⁵⁾

* * *

《…de sorte que dès ce temps il (Pascal) renonça à toutes les autres connaissances pour s'appliquer à *l'unique chose que Jésus-Christ appelle nécessaire*…》⁽⁵⁶⁾

《…dès que Dieu lui tourne le cœur, elle (Jacqueline) comprenait comme mon frère *toutes les choses qu'il disait de la sainteté de la religion chrétienne*…》⁽⁵⁷⁾

このように、地上のものに向けられた愛 (concupiscence) をふりかえて、ひたすらに神への愛 (charité) に向かう心こそ⁽⁵⁸⁾、「新しい心」の本質であり、これまではただ知的偉大さの秩序にのみ安住してきたパスカルにとって、この新しい秩序——「愛の秩序 (ordre de la charité)」の存在を教えられたことは、確かに大きい転機であった。この「最初の回心」が、《conversion de l'esprit, non du cœur》⁽⁵⁹⁾と限定づけられながらも、少くとも信仰の事柄が知性の関与する秩序とはちがった、より高い次元に属するものであり、何より《cœur》によってのみ触れうる性質のものであることをこの時示されたのは、決してパスカルの内的発展にとって意味のない出来事ではなかった。そして、サン・シランは他のジャンセニストたちよりも、《moins aride, moins rebutante》な形で⁽⁶⁰⁾、心にくい入るように《toutes les instructions de la spiritualité la plus sublime》⁽⁶¹⁾を若いブレーズのたましいに注ぎこんだのであった。

《…En lui (Saint-Cyran), c'était à celui qui était l'inspiré, de commander et de trancher; mais l'homme aussi savait s'attendre, s'attacher et pleurer…》⁽⁶²⁾

《Saint-Cyran était une personnalité très originale, brûlait d'une profonde ardeur religieuse et douée de charismes singuliers; mais aussi un homme d'une grande obscurité de pensée, et dont l'absolutisme s'accompagnait d'une sentimentalité assez facile…》⁽⁶³⁾

生れながらに émotif であったといわれるブレーズの心の奥深く、この一沫の悲壮味をたたえた霊の人の言葉はある共鳴をそこにひびかせなかったであろうか。この凜とした厳しさをたたえた思想家のなげかける暗い影に、この時ブレーズの横顔が一段と深く彫りを加えることになったのではあるまいか。わたしたちの課題はここから屈折して行くかれの思想と生涯の軌跡を、仔細にたどることである。しかし、「回心」ののち、ともかくもパスカルやその家族たちが、神の意志

へのまったき服従と靈的指導者への随順を求めるこの教えに忠実に、人間としての自己を撓めさせ、へりくだらせて行くその姿勢に注目しておきたい。

《…Ainsi cet esprit si grand, si vaste et si rempli de curiosité, qui cherchait avec tant de soin la cause et la raison de tout, était en même temps soumis à toutes les choses de la religion comme un enfant; et cette simplicité a régné en lui toute sa vie…》⁽⁶⁴⁾

《…Ils (la famille de Pascal) se soumirent à la conduite de ce saint homme (Guillebert) qui les conduisit à Dieu d'une manière admirable…》⁽⁶⁵⁾

(4)

1651年10月17日、パスカルが父の死にあたってペリエ夫妻にあてて書いた手紙の中に次のような一節が見出される。

《…C'est ce que j'ai appris de *deux très grands et très saints personnages*. La vérité qui ouvre ce mystère est que Dieu a créé l'homme avec deux amours, l'un pour Dieu, l'autre pour soi-même; mais avec cette loi, que l'amour de Dieu serait infini, c'est-à-dire sans aucune autre fin que Dieu même; et que l'amour pour soi-même serait fini et rapportant à Dieu…》⁽⁶⁶⁾

この二人の人は、ジャンセニウスとサン・シランのことであると言われる。パスカルが信仰の事柄に関して権威ある導師として、この二人にどのような敬意をささげていたかがうかがわれると思う。「最初の回心」以後、パスカルはこの二人がさし示した方向へと忠実に歩みつけ、この人たちが語ったと同じ調子で語りはじめるのである。ジャンセニウス、サン・シラン（それにアルノー）というこの三人の著者がパスカルの精神に及ぼした影響は互いにからみ合い、入りまじっており、それぞれについて《*des marques particulières et extérieures*》⁽⁶⁷⁾を見定めることは本当は困難であるといえよう。しかし、それにもかかわらず、

《Il se mit à l'école des maîtres du jansénisme, *en particulier de Saint-Cyran*…》⁽⁶⁸⁾

と言われる理由は何であろうか。何よりもサン・シランが、心によって信じる必要を説き、静寂と沈黙のうちに内にささやきかける神の声を聞き、心の痛みのうちに悔改めを果し、切実なまでに神への愛にもえあがる熱情をたたえているからではないであろうか。単に教える人でなく、熱を伝える人として、サン・シランとパスカルは確かに通じ合うのである。

1646年、デシャン兄弟は実際にパスカルにどのような書物を勧めたのであろうか。ジャンセニウスの浩瀚な『アウグスチヌス』(1640)を全部読んだかどうかは疑問であるが、おそらく部分的にはこの本の内容を知っていたであろうし、後年ポール・ロワイヤルの指導者たちから間接的に

伝え聞いたこともあるにちがいない。とくに、その第3章第2節《*De Statu Naturae lapsae*》の内容をそのまま示していると言われ、1644年アルノー・ダンディイがラテン語から訳出出版した《*Discours sur la Réformation de l'homme intérieur*》をひもどいたことはほぼ確実であり、サント・ブーヴや V. ジロー、レルメなどはその細部にわたって、パスカルに与えた影響のあとを追求している⁽⁶⁹⁾。1643年に刊行され、非常な成功を拍したアントワース・アルノーの著作《*La Fréquente Communion*》もかならず手にしていたことであろう。ところで、サン・シランについては、具体的にどの書物を読んだのであろうか。1645年、47年にアルノー・ダンディイによって出版され、以後たびたび版をかさねた《*Lettres chrétiennes et spirituelles*》第1巻、第2巻を反復熟読したことはまちがいが無いと言ってよい⁽⁷⁰⁾。当代フランスのさまざまな階級・職業の人たちにあてて、変化に富んだ、それぞれに鋭い指針を与えているサン・シランの手紙の文体と内容がどこまでパスカルに深い影響を残しているか、わたしたちは以下にその詳細な検討をこころみるはずである。この時期に直々サン・シランの名が出てくる文献としては、次の2点があげられる。

ジルベルトの《*La Vie de Jacqueline Pascal*》に次の記述が見出される。

《…Sur la fin de l'année 1646, M. du Bellay faisant les ordres à Rouen, ma sœur, qui n'avait pas encore été confirmée, voulut recevoir ce sacrement. Elle s'y prépara selon ce qu'elle en apprenait dans dans les *petits traités de Saint- Cyran*. L'on peut croire qu'elle y reçut véritablement le Saint- Esprit, car depuis cette heure-là elle fut changée. Toutes les lectures et tous les discours firent une si forte impression dans son cœur…》⁽⁷¹⁾

ここで les petits traités と言われているのは、1645年に出版された Saint- Cyran: 《*Théologie familière et explication des principaux mystères de la foi*》のことであり、いくつかの小論考が含まれているが、その中に《*Instruction pour se disposer à recevoir le Sacrement de Confirmation*》があり、ジャックリーヌは特にこの論述に教えられたものとみられる。《*Théologie familière*》は、サン・シランが友人ビニョン氏の頼みで、その子供たちの教育のためにつくった小カテキズムとも言うべきものであり、のちにリヨン版《*Œuvres chrétiennes et spirituelles*》t. IV (1679)におさめられるが、この中には1642年から46年の間に個々に公刊されたいくつかの小品が含まれており、いずれもブレースの目にふれたことがあると推定される。

1648年4月1日付ペリエ夫人あてのブレースの手紙は次のように書きはじめられている。

《…Nous avons ici la lettre de M. de Saint- Cyran, De la vocation, imprimée depuis peu sans

approbation ni privilège et qui a choqué beaucoup de monde. Nous la lisons; nous te l'enverrons après. Nous serons bien aises d'en savoir ton sentiment et celui de monsieur mon père. Elle est fort relevé...》⁽⁷²⁾

このサン・シランの手紙というのは《*Lettre de messire du Verger Hauranne à un ecclésiastique de ses amis (Du Hamel) touchant les dispositions à la prêtrise*》(1647) のことであり、前述のリヨン版第3巻におさめられている。この書の内容を知るためには、次の二章の標題をあげるだけで十分であろうとブランシュ・ヴィクは注記している⁽⁷³⁾。

Chap. VIII. -- De la nécessité d'une véritable vocation de Dieu pour bien entrer dans les ordres et dans les charges ecclésiastiques.

Chap. XVI. -- Trois choses qui font juger à l'auteur combien la vraie vocation à la prêtrise et aux charges ecclésiastiques est rare en ce temps.

総じて1648年中にペリエ夫人、または夫妻あてに書かれたパスカルの3通の手紙は、明らかにサン・シランの諸著作とふだんにしたしんでいた雰囲気の中でしたためられたものであり、当時のパスカルの心境を如実に反映しているばかりか、「最初の回心」がその精神にもたらした感動をはるかに伝えているように思われる。わたしたちは、次章以下にその詳細な分析を進めて行くはずであるが、今ここでは、回心直後のかれの生活に生じた直接的な顕著な変化を二三ひろい上げてみることにしたい。

(5)

E. カイリエは、これまでパスカルは自然だけを直接の対象としてその科学研究を進めてきたが、この時はじめて「書物」に対して興味をひきおこされ、「書かれた世界」への共感が芽生えたことを指摘している⁽⁷⁴⁾。わたしたちはこれに加えて、実験によって確かめられる次元のほかに、あの『真空論断片』で表明されたもう一つの秩序、権威を重んじる秩序との具体的な出会いがあったことを見失わずにおきたい。少なくともパスカルが、絶対の権威と伝承とを伝える聖書や教父の書を、この時から、サン・シランに教えられたように「膝まづいて読む (lire à genoux)」ことをはじめるのである⁽⁷⁵⁾。レルメも考証しているように、サン・シランはくりかえし聖書を読むことをすすめ、その正しい読み方を懇切に指示している⁽⁷⁶⁾。ジャンセニウスやサン・シランの教理が、単に聖書の根底に立っているということだけではなく、直接源泉に立ち帰ること、しかも自己を空しくするという謙虚の姿勢をとることによってその証言を受け入れようとする基本的

な聖書理解のありかたを教えられたことは確かに注目しておいてよい点であろう。のちに、パスカルは次のように書く。

《…Suivez la manière par où ils ont commencé: c'est en faisant tout comme s'il croyaient, en prenant de l'eau bénite, en faisant dire des messes, etc. Naturellement même cela vous fera croire et vous abêtira…》⁽⁷⁷⁾

かれ自身は、この時それを「はじめた」のである。ジルベルトは、回心後のパスカルについて

《…et cette vérité lui parut si évidente, si nécessaire et si utile, qu'elle termina toutes ses recherches…》⁽⁷⁸⁾

と報告している。この記述はいささか誇張であると言えないであろうか⁽⁷⁹⁾。「最初の回心」以後、パスカルが完全に科学研究を放棄してしまったのではないことははっきりとした事実であり、同年10月には前述のように早くも真空実験が開始されている(ジルベルトがこの順序を間違えたのは、自らの記述に欺かれたためか、あるいは上の断言に矛盾をきたさないための意識的な細工とも考えられる)。次いで、1647年には《*Expériences nouvelles touchant le vide*》の刊行、ノエル神父との論争、《*Récit de la Grande Expérience de l'Equilibre des Liqueurs*》の執筆(1648年10月刊)、さらに48年、《*Génération des sections coniques*》の発表となり、53年から54年にかけて物理学・数学上の重要論文が相次ぎ、この間にルーアンで発明された計算機の完成目ざしてブレーズの努力はつづくのである。これらの業績は決して、後年の「サイクロイド」問題解決のような《*une occupation passagère*》ではなかったことに注意しよう⁽⁸⁰⁾。實際上、ジルベルトやジャックリーヌのつよい断定にもかかわらず、この間特に *charité* の実践も記録されていず、科学者としてのかれの活動は完全にそのすべての精神を傾注して行われていたとみなされる。わたしたちはここで、熱心なジャンсениストであったジルベルトの伝記が何より過度に亡き弟への敬愛に支えられ、その上教化と弁証をも目ざすものであったことを思い起しておきたい。また、彼女が第二の決定的な回心の記憶にとらわれすぎており、そのために最初の回心をもいくらか美化し、純粋化しすぎて想像する結果になったのかもしれない。それに、この以後パスカルが接触するポール・ロワイヤルにおいても、たとえばアルノーは決して数学を軽んずることがなかったし、ルブール師のように峻厳な性格の人でもメルセンヌと親交を結び、自分でも多くの科学書を蔵していたと伝えられており、必ずしも人々は全面的に科学的な営みを遠去けていたわけではなかった。ジャンсениウスやサン・シランが世俗の学問研究をしりぞけたのは、知的探求それ自体を攻撃したというよりむしろ、知的好奇心にともなうむなしい・不必要なまでの対象への関心、自分自身をたのむ傲慢を追及したのであった。すなわち、*libido sciendi*, *libido excellendi* とい

うこの世の邪欲が烈しく糾弾されたのであった⁽⁸¹⁾。

《…l'abbé pouvait attester que *la passion de savoir qui s'attache à la science pour elle-même nuit plutôt qu'elle ne sert, même pour la connaissance de la pure vérité*, car elle *enfle le cœur* qui est vite aveuglé par une *présomption* et par une *passion secrète*…》⁽⁸²⁾

《…Mais, dans la seconde, intitulée De la curiosité en quels termes troublants il voyait décrite et condamnée cette <curiosité toujours inquiète, a été appelée de ce nom à cause du *vain désir de savoir, et que l'on a palliée du nom de science*>. <Le monde, déclarait l'orateur, est d'autant plus corrompu par cette maladie de l'âme, *qu'elle se glisse sous le voile de la santé, c'est-à-dire de la science*…De là est venue la recherche des secrets de la nature, *qui ne nous regardent point, qu'il est inutile de connaître, et que les hommes ne veulent savoir que pour les savoir seulement*>…》⁽⁸³⁾

こうした教えのために、1646年以後表面的にはかわらぬ仕方で継続されているとみえるパスカルの科学研究の態度にある微妙な違いがあらわれてきたことを、メナアル氏は示唆している。たとえば、大法官セギエへの《*Lettre dédicatoire de la machine arithmétique*》(1645) などには、栄誉ある成果をあげた少壮の科学者の誇らしさがそのまま溢れていて、サン・シランに非難された傲慢さの片鱗がうかがえるのであるが、「回心」以後、いわゆる「社交生活の時期」(1648—53) にいたるまで、そうした高慢さはまったく影をひそめるのである。たとえば、1947年18月29日ノエル神父あての手紙には、次のような表現が見出される。

《Et nous réservons pour les mystères de la foi, que le Saint-Esprit a lui-même révélés, *cette soumission d'esprit* qui porte notre croyance à des mystères cachés aux sens et à la raison…》⁽⁸⁵⁾

「最初の回心」は外側から眺めたかぎりでは、パスカルの生活にそれほど著しい変化をもたらさなかったように思われる。一家全部が「回心」したといっても、エチエンヌ・ペリエは娘の修道院入りに最後まで反対しつづけたし、ペリエ家の人々もクレルモン郊外ビアンナシに広大な土地をあがない、その地主となり、終生世俗生活を離れることがなかった。もっとも熱心であったジャックリーヌも、修道女への志願を決心したのは、ながい内的苦悩をへて、やっと2年後のことにすぎなかった。1646年はパスカルにとって記念されるべき年であるとしても、その回心はまだ不完全であり、サン・シラン、ジャンセニウスの教えた精神を文字どおりに実行する状態には遠かった。いわば、シュヴァリエの言ったように、パスカルは、真の「回心」がどういう性質のものを「理解」し、完全の律法がどういう内容のものであるかを「知り」、神にすべてをささげねばならないことを「教えられた」にすぎなかった⁽⁸⁶⁾。要するに、神を愛すべきことを「知った」ととどまり、「愛する」にはいたらなかった。『パンセ』の中の次のような言葉は、

かれ自身の自己反省の表現として受けとることができるであろう。

《Ces hommes prennent souvent leur imagination pour leur cœur et ils croient être convertis dès qu'ils pensent à se convertir…》(fr.100)

《Qu'il y a loin de la connaissance de Dieu à l'aimer;…》(fr.721)

しかし、わたしたちは、かれの心にこの時、あの教えが残した傷あとを見のがさずにいたい。人間が自分の力では何一つ果すことができないこと、その自己から脱け出るときに人間の感ずる苦痛、神がより高い秩序へと引き上げたもう恩寵の働きの絶対的な有効さ、こういった事柄を心の奥底にしみ入る方法で説きつくすサン・シランの言葉にふれて、パスカルの心にはある不安が残ったのにちがいない。また、ヴェンセンヌの石の床に晩年の身を横たえたこの人からもれ溢れ出す苦悩のパトスが、病めるパスカルの危機感と共鳴し合い、やがてかぎりなく苦難のミスチックを追い求めて行く「内なる心のふるえ」^{フレイミッスマン・アンテリユール⁽⁸⁷⁾}を呼びさましたのにちがいない。この不安、このおののきが、この後になおつくきらびやかな科学者としてのかれの成功、社交生活の多彩な日々の中にもパスカルの心の底にひそみ、やがて決定的に自己の存在の惨めさ、この世の空しさをその眼前につきつける刃となるにいたるのである。

《…Je souhaiterais néanmoins d'y contribuer quelque chose, mais je n'ai aucune des parties qui sont nécessaires pour cet effet. Ma faiblesse est si grande…》⁽⁸⁸⁾

《…Cette nouvelle lumière lui donne de la crainte, et lui apporte un trouble qui traverse le repos qu'elle trouvait dans les choses qui faisaient ses délices. Elle ne peut plus goûter avec tranquillité les choses qui la charmaient. Un scrupule continuel le combat dans cette jouissance, et cette vue intérieure ne lui fait plus trouver cette douceur accoutumée parmi les choses où elle s'abandonnait avec une pleine effusion de cœur…》⁽⁸⁹⁾

註

- 1) La Vie de Pascal par Mme Périer, in Œuvres Complètes de Blaise Pascal, texte établi, présenté et annoté par J. Mesnard, Desclée de Brouwer, 1964, 1ère Version, pp. 577—578, 2e Version, pp. 608—609.
- 2) Lettre de Pascal à M. de Ribeyre, 16 juill. 1651. 《…Ces nouvelles nous ayant été en l'année 1646 portée à Rouen, où j'étais alors, nous y fîmes cette expérience d'Italie sur les mémoires du P. Mersenne…》(Œuvres Complètes de Pascal, notes par J. Chevalier, Biblio. de la Pléiade, 1954, p.404)

- 3) ジルベルトの記録にあきむかれて、「回心」を実験より後に位置させている研究書も少ない。たとえば, Ernest Mortimer: Blaise Pascal, Happer & Brothers, 1959, p.71.は, 1645年8月に実験が行われたとしている。
- 4) La Vie de Jacqueline Pascal, *in op. cit.* p.663.
- 5) Mémoires sur Pascal et sa Famille, *in op. cit.* pp. 1097—1099.
- 6) *ibid.*, p.1099.
- 7) La Vie de Pascal, *in op. cit.* p.663.
- 8) V. Giraud: Pascal, Bonne Press, 1949, t.I, p.44.
- 9) B. Pascal: Pensées et Opuscules, Hachette, 1897, notes de L. Brunschvicg, p.55.
- 10) J. Orcibal: Saint-Cyran et le Jansénisme, Ed. du Seuil, 1961, p.163.
- 11) T. S. Eliot: Introduction to “Pensées of B. Pascal”, translated by F. Trotter, Everymans Lib., 1947, p.VIII.
- 12) F. Strowski: Pascal et son temps, 1907, t.2, p.205.
- 13) V. Giraud: Pascal, Ed. de Boccard, 1922, p.49.
- 14) Sainte Beuve: Port-Royal, Biblio. de la Pléiade, Gallimard, 1953, t.I, p. 891.
- 15) E. Baudin: La Philosophie de Pascal, t.2, Pascal, les libertins et les Jansénistes, Ed. de la Baconnière, 1946, p.112.
- 16) *cit. in* V. Giraud: *op. cit.*, p.42.
- 17) M. Bishop: Pascal, the Life of Genius, Reynal & Hitchcock, 1936, p.41.
- 18) 野田又夫: パスカル, 岩波, 1943, p.46
- 19) La Vie de Pascal par Mme Périer, *op. cit.*, p.576.
- 20) M. Périer: Mémoires..., *in op. cit.*, p.1099.ただし, エチエンヌが一ばん先に回心したかのよう
に記録している資料もある。cf. 《…tu sais que mon Père nous a tous prévenus…》(Lettre de
Jacqueline à Mme Périer, 1648). 《…si je l’eusse perdu il y a six ans je me serais perdu…》
(Lettre sur la mort de Pascal le père, écrite par Pascal à sa sœur aînée, Mme Périer, et à son
mari)などは, そのように受けとれる。
- 21) 拙論:『異端者パスカル』, および『mystique としてのパスカル』(大阪外国語大学学報, 13号および
15号)。
- 22) 《…Disciple soumis, il adopta sans réserve la doctrine des maîtres de Port-Royal, doctrine qui
donna une teinte pessimiste à sa philosophie…》(J. Lhermet: Pascal et la Bible, Vrin, 1931, p.
90).

- 23) La Vie de Pascal par Mme Périer, *in op.cit.*, p.578.
- 24) 《…Blaise Pascal a grandi dans un climat de foi, de cette foi naturelle et comme instinctive…》
R. Guardini: Pascal, ou le drame de la conscience chrétienne, Ed. du Seuil, 1953, p.183).
- 24) M. Perroy: Les Pascal, un trio fraternel, Letouzey et Ané, 1959, pp.41—42.
- 25) 《…cette éducation paternelle fut *exclusivement intellectuelle*…》(Pensées et Opuscules, *op. cit.*, notes de L. Brunschvicg, p.3).
- 26) J. Mesnard: Pascal, l'homme et l'œuvre, Boivin, 1951, pp.23—25.
- 27) La Vie de Pascal. par Mme Périer, *in op. cit.*, p.560.
- 28) La Vie de Pascal par Mme Périer, *in op. cit.*, p.578.
- 29) La Vie de Jacqueline Pascal par Mme Périer, *in op. cit.* p.663.
- 30) たとえば, ラシーヌ。
- 31) Commissionnaire député par Sa Majesté en la Haute-Normandie pour l'impôt et levée des tailles…
- 32) 《Polyeucte》における janséniste 的要素については, サント・ブーヴもふれている。(Sainte-Beuve: Port-Royal, *op. cit.*, pp.177—201).
- 33) M. Périer, *op. cit.*, pp.1097—1093.
- 34) Pensées et Opuscules, *op. cit.*, notes de L. Brunschvicg, p. 48.
- 35) 《…le passage d'une vie plus ou moins dissipée et mondaine à une vie austère et de profonde piété…》(J. Lhermet, *op. cit.*, p.69). cf. Sainte-Beuve, *op. cit.*, p. 894.
- 36) 会計官, エチエンヌの同僚といってよい人。サン・シランによって回心させられた後は, 職を投げうって妻とともに隠遁生活に入った。子供たちは, ポール・ロワイヤルで育てられ, のち, ルーヴィユ近くで隠遁生活に入った。
- 37) J. Mesnard, *op. cit.*, p.29.
- 38) M. Périer, *op.cit.*, 1098.
- 39) *ibib.*, p. 1098.
- 40) 1640年の日付のもの……8通
1641年の日付のもの……22通
1642年の日付のもの……37通
(次注, および注〔70〕の2冊に含まれる手紙のうち)。
- 41) Saint-Cyran: Lettres chrétiennes et spirituelles, t. 1, 1645, avant-propos d'Arnauld d'Andilly, p.2.
- 42) *cit. in*, E. Jaccard: Saint-Cyran, précurseur de Pascal, Ed. La Concorde, 1945, p.185.

- 43) *cit. in*, Pensées et Opuscules, *op.cit.*, notes de L. Brunschvicg, p.53.
- 44) G.Truc: Pascal, son temps et le nôtre, Albin Michel, 1949,p.67.
- 45) Pensées et Opuscules, *op.cit.*, notes de L. Brunschvicg, p.53.
- 46) J.-E. d'Anger: Pascal et ses précurseurs, Nouvelles Editions Latines, 1954,p.71.
- 47) E. Mortimer, *op cit.*, p.54.
- 48) Pensées de Joubert.
- 49) サン・シラン自身に、小品《Le Nouveau Cœur》がある。Œuvres…de Saint Cyran, Lyon, 1679,
t.3 におさめられる。
- 50) Saint-Cyran: Lettres…, t.1, Let.XXII.
- 51) *ibid.*, Let. LXVI.
- 52) La Vie de Pascal par Mme Périer, *in op. cit.*, p.577.
- 53) Evangile selon saint Matthieu, 22:37.
- 54) *cit. in*, Jaccard: Saint-Cyran …, *op. cit.*, p.278.
- 55) Saint-Cyran: Lettres…,t.1, Let. XLII.
- 56) La Vie de Pascal par Mme Périer, *in op. cit.*, pp.577—578.
- 57) *ibid.*, p.611.
- 58) Pensées fr.414 (Ed. Lafuma).
- 59) H. Brémond, *cit. in*, H. Baudin, *op.cit.*, p. 32.
- 60) Rapin: Histoire du Jansénisme, *cit. in*, J. Lhermet, *op. cit.*, p.106.
- 61) *ibid.*
- 62) F.Strowski: Pascal et son temps, *op. cit.*,t.2, p.199.
- 63) R. Guardini, *op. cit.*, p.184.
- 64) La Vie de Pascal par Mme Périer, *op. cit.*, p.578.
- 65) M. Périer, *op. cit.*, p.1099.
- 66) Opuscules et Lettres de Pascal, avec biographie et notes de L. Lafuma, Aubier,1955, p.202.
- 67) B. Pascal: Œuvres publiées suivant l'ordre chronologique, avec documents complémentaires,
introductions et notes par L. Brunschvicg, P. Boutroux et F. Gazier, Hachette, 1904—1914,
t.12, p. XI.
- 68) J. Lhermet, *op. cit.*, p.134.
- 69) cf. Sainte-Beuve; Port-Royal, *op. cit.*, pp. 892 et suite; V. Giraud, *op. cit.*, pp. 45—46; J.
Lhermet, *op. cit.*, pp. 109 et suite.
- 70) Lettres Chrestiennes et Spirituelles de Messire Jean du Verger de Havranne, abbé de St-Cyran,

dédiées à Messeigneurs les illustrissimes et reverendissimes archevesques et evesques de France,
Paris, M.DC. XLV.

- 71) *op. cit.*, pp. 663—664.
- 72) Opuscuies et Lettres de Pascal, *op. cit.*, pp. 186—187.
- 73) Pensées et Opuscules, *op. cit.*, p.87.
- 74) E. Cailliet: Pascal, the Emergency of Genius, Harper & Brothers, 1961, p.56.
- 75) Saint-Cyran :Lettres..., t.1, Let.XXI.
- 76) J. Lhermet, *op. cit.*, pp.106 et suite.
- 77) Pensées fr.343.
- 78) La Vie de Pascal par Mme Périer, *op. cit.*, p.578.
- 79) cf. ...une personne qui n'est plus mathématicien... (Lettre de Jacqueline Pascal, 25 juill. 1647).
- 80) «...Cependant cet esprit si vaste avait changé d'inclination à l'égard des sciences dès l'âge de 24 ans. La roulette n'avait été en lui qu'une *occupation passagère*» (Mémoires de M. Lamy, Œuvre Complètes de B. Pascal, *op. cit.*, p.773).
- 81) Première Epître de saint Jean, 1:16.
- 82) J. Orcibal, *op. cit.*, p.102.
- 83) V. Giraud: Pascal, Bonne Press, *op. cit.*, pp.45—46.
- 84) J. Mesnard, *op. cit.*, pp.31—32.
- 85) Œuvres Complètes de Pascal, Biblio. de la Pléiade, 1954, p.371.
- 86) J. Chevalier: Pascal, Plon, 1923, p.82.
- 87) 拙訳：バスカル「病と死についての冥想」——祈りと小品と手紙——，1959，新教出版社，解題，p.33.
- 88) Lettres de Pascal, à Mme Périer, 26 janv. 1648. cf. Opuscules et Lettres de Pascal, *op. cit.*, p.148.
- 89) Sur la Conversion du Pécheur, *in* Opuscules et Lettres de Pascal, *op. cit.*, p.64.